

資料室だより 168

***Clara Schumann: Drei Präludien und Fugen op 16** Edition Dohr

シューマンの妻にして偉大なピアニスト、また作曲家でもあったクララ・シューマンのオルガン作品という珍しい楽譜を購入しました。ケルンにある Edition Bon(n)Orgue というシリーズの 20 巻です。

クララは幼少期からバッハをよく勉強し、コンサートのレパートリーにもそれが大きな位置を占めていたということです。メンデルスゾーンによるバッハのマタイ受難曲の歴史的復活の年（1829年）、10歳だったクララはこれを聞いたであろうことは予想されます。メンデルスゾーンの「オルガンのための3つのプレリュードとフーガ、op35」に刺激されたクララはオルガンのレジストレーションの知識がないまま「ピアノのための3つのプレリュードとフーガ」を作曲しました。クララの作品表のなかではこれはピアノ曲に分類されていますが性格的にはオルガン曲です。Thomas Schmögner がこれをオルガン曲としてトランスクリプションしました。バッハの「フーガの技法」の痕跡もみられ、D moll のフーガではバッハの平均律曲集 1 巻の A moll の壮大なフーガの最後を思わせる、ピアノでは演奏不可能なオルゲルポイントがあります。

***近代日本キリスト教文学全集 15：讚美歌集** 教文館

これは資料室の 2 階棚で利用されることもなく眠っている本です。文学全集のなかに讚美歌の歌詞が詩として味わわれるために編纂されています。2月に行われた講演会「日本の教会に響く歌」の講師松橋氏も、聖歌のテキストは黙想の糧としても読まれるものであったので美しい五七調で和歌のように作られて朗読に耐えるものであったと言っておられたのが印象的でしたが、まさにこの本は讚美歌を詩として読むべきという主張で編纂されています。序文にはこのように書かれています。「讚美歌は文学的に見れば、一種の宗教的抒情詩である。その表現も内容も文学的基準のもとに検討されねばならないものである。…（中略）まず讚美歌を宗教詩として正しく理解することがなされねば、讚美歌の正しい理解ということはできないことを忘れてはならない」（竹内信）。この志こそキリスト教文化が高度な精神性と芸術性をもって世の中に存在できた時代の証です。

はなさきかをる とこしえにいろかうつらぬ あまつよに のどけきそらの
はるたえぬ かみのみやこに いまぞゆく